

この空の下で  
生きていく

～世界でたった一人のあなたへ～

# ちから あわせ 生きて

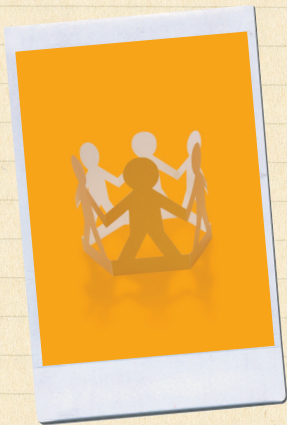
人間は、一人では生きていくことはできません。自分一人で生きていると思ったら、それは大きなまちがいです。災害から立ちあがった人、病気を乗り越えた人、それをとなりで支えた人。みんな誰かを思いやり、みんな誰かと助けあって生きています。同じ空の下で暮らす仲間どうし、これからも、ちからをあわせて生きていきませんか。



を

て

いく



## 「いのちと向き合う」

広島市佐伯消防団 五日市南分団 班長

江上 一信

「おーい、何しよるんや。人が1人まだ埋まっとるんど。」この一言を今も忘れる事ができません。1999(平成11)年6月29日、佐伯区を襲った6.29集中豪雨災害です。

その日私は、いつものように家業の建築の仕事をしていました。梅雨時期でもあり、雨もよく降っていましたので、事務所では図面の整理をしていたと思います。

午後3時を過ぎた頃一本の電話が入りました。消防団員招集の連絡。私は早々に仕事を済ませて、服を着替えて分団車庫へと向かいました。団車両に乗り、消防団の仲間と共に消防署に行き、指示を受けて現場へと…。途中で無線が色々な所で被害が出ていると言っているのを聞き、何か大変な事が起きているのかと、この時思いました。増水していつもと違う八幡川。そして崩れた山。

現場に着き、準備をしていると、「おーい、何しよるんや。人が1人まだ埋まっとるんど。」の大声。私たちはスコップを手へ取り、すぐ現場に入り、土砂との格闘が始まりました。そこは、ある会社の事務所でしたが、崖崩れに襲われ、流れた木々、土砂で元の形はとどめてません。何とか自力

で難を逃れた人も泥だらけで、心配そうに見ているだけだったのを覚えています。

私たちは何とか助けようと、土砂を取り除こうとするのですが、足下も悪く、うまくいきません。なんと無力なんだろう、私は何もできない自分に情けなくなりました。少し時間がたち、重機が到着し何とか土砂を取り除き、行方不明者を発見しましたが、生きて助ける事はできませんでした。

救急車までみんなで運び、救急救命士の方に心臓マッサージ、心肺蘇生法等をやっていただきましたが、目をあけてくれる事は、もうありませんでした。私は手を合わせる事しかできませんでした。

今、日本は高齢化社会に突入しています。色々な施設にも、AED(自動体外式除細動器)が導入され救急車が来るまでの処置が大事になってきています。心臓マッサージ、心肺蘇生法、私にもできる事があるかもしれませんが、一人では無力です。救急車を呼ぶ人、AEDを持って来てくれる人、やじ馬を整理してくれる人、その場に居合わせた人の適材適所が人の命を助けると思います。

微力ではありますが、これからも消防団活動に取り組んでいきたいと思っています。





いのちと  
向き合う

## 思いやりの心が生んだ ホスピタルアート。

### 人が生きぬく場所に必要なもの



県立広島病院の緩和ケア支援センターには、壁一面に描かれた絵が、訪れる人をあたたかく迎えてくれる相談室があります。東広島市在住の美術家・中本裕史さんが、デイホスピスに通う患者さんやボランティアと一緒に、絵筆を握って思い思いの花を咲かせました。

「不安を抱えて来られる方も、この部屋に入ると緊張が解けたように、ほっと息をつかれます。ホスピタルアートのおかげで、心を開いてもらえる空間になりました」と、緩和ケア支援室

の阿部まゆみ室長。自分らしく生きることを支える緩和ケアの分野では、アートセラピー（芸術療法）の一つとして、ホスピタルアートへの関心が高まっています。

ホスピタルアートとは、病院の壁や柱に絵を描いたり、芸術作品を展示して、快適な医療環境づくりを目指す活動です。欧米では積極的に導入され、患者さんの心を癒し、保健医療に携わる人たちのストレスをやわらげることを目的に、広島県内の医療機関でも取り入れる動きが広がっています。





## 白い壁に生命力があふれだす

ホスピタルアートをプロデュースした稲田恵子さんは、大竹市の独立行政法人国立病院機構・広島西医療センターや広島市民病院の小児外来待合室の壁画なども手がけてきました。広島西医療センターの壁に描かれた花のタネが、緩和ケア支援センターに飛んで来て新たな花を咲かせた…。そんな物語も紡ぎながら、ホスピタルアートの広がりにも力を尽くしています。

病院内の芸術作品展示はこれまでも行われてきましたが、稲田さんがこだわるのは、壁に筆で直に絵を描くこと。無機質な壁に体温や生命力が宿り、その熱が人に伝わると信じているからです。「アーティストの芸術作品ではなく、あくまでも空間演出。モチーフは花や樹、雲など自然界にあるもので、やさしい、きれいな、だけじゃない、生きぬく力強さが必要です」。



稲田さんから壁画制作の依頼を受けた中本さんも、「見た人が気持ちいいと感じる色彩やフォルムを、自分なりに研究しました」。得意なアートで社会の役に立つ喜びを実感し、絵を描く仲間たちにも活動の輪を広げたいと願っています。



## アートで人を思いやり、助け合う

「色の温もりをいちばん必要とする場所が、機能最優先で無機質な空間になってしまっている」という稲田さん。ホスピタルアートの領域は、病院だけではないと考えています。子どもたちが体の不調を訴え、心の居場所を求めてやって来る学校の保健室にも、明るく元気になれるような色彩やアート表現を提案。すでに、広島市内のいくつかの小学校で導入されました。「人間は昔から、病んでいる人のそばには花や人形を飾って、少しでも癒されるように願ってきました。

ホスピタルアートも同じです」。

人が人を思いやり、助け合う心から生まれた活動だけに、臭いのない特殊な塗料を使うなど、制作には細心の注意が払われています。

病院では、患者さんやスタッフに参加してもらい、力を合わせて創造する喜びを分かち合えることも、ホスピタルアートの魅力の一つ。心を閉ざしていた患者さんが、絵筆を持った途端に表情が変わり、自分が描いた花に向かって夢を語りはじめたこともありました。





## 信じること、やり続けること

ホスピタルアートの効果は人それぞれ。けれど、色やフォルムが五感にやさしい刺激を与え、生きることへの前向きな姿勢につながると期待されています。「意義を信じて、やり続け

ることが大切だと思っています」と稲田さん。生命力のあるホスピタルアートは、患者さんや家族、そこで働くスタッフにも好評です。



### 色彩プロデューサー 稲田 恵子さん

廿日市市在住。(有)稲田恵子オフィス代表。都市の色彩計画を手がけ、広島市風景づくり推進委員会委員などを務める。色彩心理学を学び、北欧の医療・福祉・教育現場、ロンドンのホスピスで研修。広島県を中心にホスピタルアートの普及に取り組んでいる。



## チームワークでいのちを救う。

### 救急救命は連携プレー

広島県内の救急車の出動件数は、近年増加の一途をたどっています。救急隊員は通常3名ひと組のチームで出動し、救急救命士の資格を持つ隊員が同乗。一刻も早い処置が求められる救急現場で、多くのいのちを救っています。

1991（平成3）年に施行された救急救命士法によって、救急車で搬送

中の重度傷病者<sup>しょうびょうしゅ</sup>に対し、気道の確保や電気ショック、輸液処置などの救急救命処置を行えるようになりました。

広島市中消防署の三谷隆救急係長は、「一分一秒、いのちに対して責任ある行動が求められる現場では、冷静な判断力と傷病者を何としても助けたいという熱意がなければ務まりません。スキルアップをすることで、





一人でも多くの人を救えると思うと、訓練にもいっそう力が入ります」。

搬送先の医師に経過処置を的確に報告することも、救急隊員の役割です。「救急救命活動は、それぞれのライセンスで役割分担をする救急隊員と、医療関係者との連携プレーによって成り立っています。場合によっては、消防隊や救助隊と協力し合うこともあり、現場ではチームワークがとても重要です」。

こうして搬送した傷病者が、回復

に向かうことが全員の願い。「我々の仕事は搬送までですが、後日、担当医から、あの時の患者さんは元気になって退院されましたよ、という連絡を受けたときが何よりうれしいですね」。





## 救急車は地域に暮らすみんなのもの

119番の出動要請を受けると、最寄りの消防署・出張所から救急車が出動します。すでに出動している場合は、次に近いところから出動することになります。地域の救急車は、その地域に暮らすみんなで共有しているもの。それぞれが適正な利用に協力することが、救命を待っている傷病者を救うことにつながります。

広島市消防局の尾形昌克救急課課長補佐は、「電気ショックが必要な患者さんでは、救急車の到着が1分遅れると、救命率が7～10%落ちるといわれています。便利だからという理由で救急車を利用されると、いのちの危機に瀕<sup>ひん</sup>している傷病者を待たせてしまうかもしれません。尊<sup>うん</sup>いいのちを救うために、救急車の適正利用にご協力をお願いします」。



## 誰もがみんな救命チームの一員

救急車が到着するまでの適切な応急手当も、いのちを救う大きなちからになっています。

人工呼吸や心臓マッサージに加え、2004(平成16)年7月から一般市民もAED(自動体外式除細動器)を使った救命措置が行えるようになりました。それにともない、救命のリレーの重要性がますます叫ばれています。

すばやい119番通報→すばやい応急手当→救急隊員の処置→病院での処置。この四つをつなぐ、救命のリレーの第一走者は一般市民のわたしたち。誰もがみんな、いのちを救うチームの一員なのです。ちからをあわせて、大切ないのちを守っていきませんか。

※広島市消防局では、一般市民を対象とした応急手当の講習会(普通救命講習)を随時開催しており、2006(平成18)年度は約12,000人が受講しました。